

市川市の英語教育について（案）

市川市教育委員会
学校教育部指導課

1 現状

市川市では、グローバル化に対応できる人材育成の一環として、英語教育の充実に取組み、ALTや外国語活動指導員とのチームティーチングにより「生きた英語」を学べるよう推進してきている。

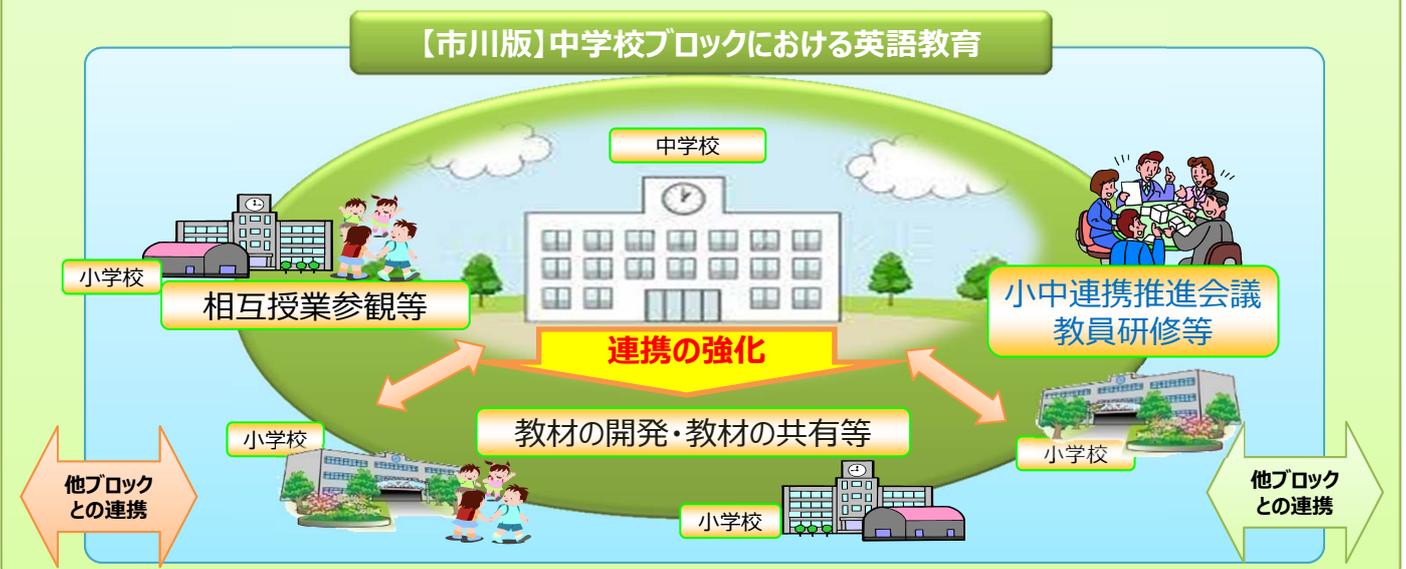
- ALT (Assistant Language Teacher)外国語指導助手(中学校15校・義務教育学校1校)各校1名計16名
- 外国語活動指導員 (13名 一人3校に派遣 小学校38校・義務教育学校1校 計39校)
(指導員の条件) ①英語の教員免許所有 ②英語教育に関する知識・経験 ③海外生活経験者のいずれか

2 今後の方向性

文部科学省では、次期学習指導要領の完全実施を平成32年度に小学校からはじめる予定としている。また、平成30年度から小学校3・4年生では「外国語活動」5・6年生では、教科としての「英語」の先行実施が可能であることが示されている。（別紙参照）

（本市の基本的な対応案）

- ・本市では、学校現場の混乱を少しでも軽減するために、次年度より準備可能な研修、教材研究等は、進めたいと考えている。
- ・完全実施に向け、「小中連携の在り方」、「教材の開発」、「教員やALT、外国語活動指導員の研修」の充実を図る。
- ・平成32年度からの完全実施に向けて、平成30年度から先行実施として、小学校3、4年生に外国語活動を実施する予定。5、6年生の教科「英語」については、国の教材開発等の状況を見ながら実施を検討。
- ・継続して英語に堪能な人材（ALT・外国語活動指導員）を配置し、児童生徒にとって楽しく、そして、分かりやすい授業となるよう努める。
- ・中学校ブロックを中心とした、英語教育の連携の強化を図る。



3 課題

- (1) 小学校教員の「英語」に関する専門性の向上や外国語指導員の研修について。
- (2) デジタル教材開発や授業におけるICTの効果的な活用及び環境整備について。
- (3) 平成30年度から、3・4年生の外国語活動を先行実施をしない場合、下の図1に示したように、突然5年生から教科「英語」の授業を受けることになる。
- (4) 効果的な小中高連携について。
- (5) 市川教育の特色である「英語に堪能な外国語活動指導員」の確保について。
- (6) 3年生から6年生まで、週1コマ授業が増えることへの対応について。

(図1)

| | | | | |
|--------|--------|--------|--------|---------|
| 2016年度 | 2017年度 | 2018年度 | 2019年度 | 2020年度 |
| 平成28年度 | 平成29年度 | 平成30年度 | 平成31年度 | 平成32年度 |
| | | 先行実施 | | 完全実施(小) |
| 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | 5年生 |

【参考】 平成27年度実施「千葉県英語の学力状況調査」の結果について

- ・千葉県では、県内公立の中学生を対象に、英語の学力調査を平成27年度から実施。
- ・英検IBAテスト(財団法人 日本英語検定協会)によるマークシート方式
- ・文部科学省は、中学校の卒業時には、英検3級程度の力を有する生徒の割合を50%以上と目標を示している。市川市の昨年度の結果は、3級レベル以上の割合63%

(図2参照)

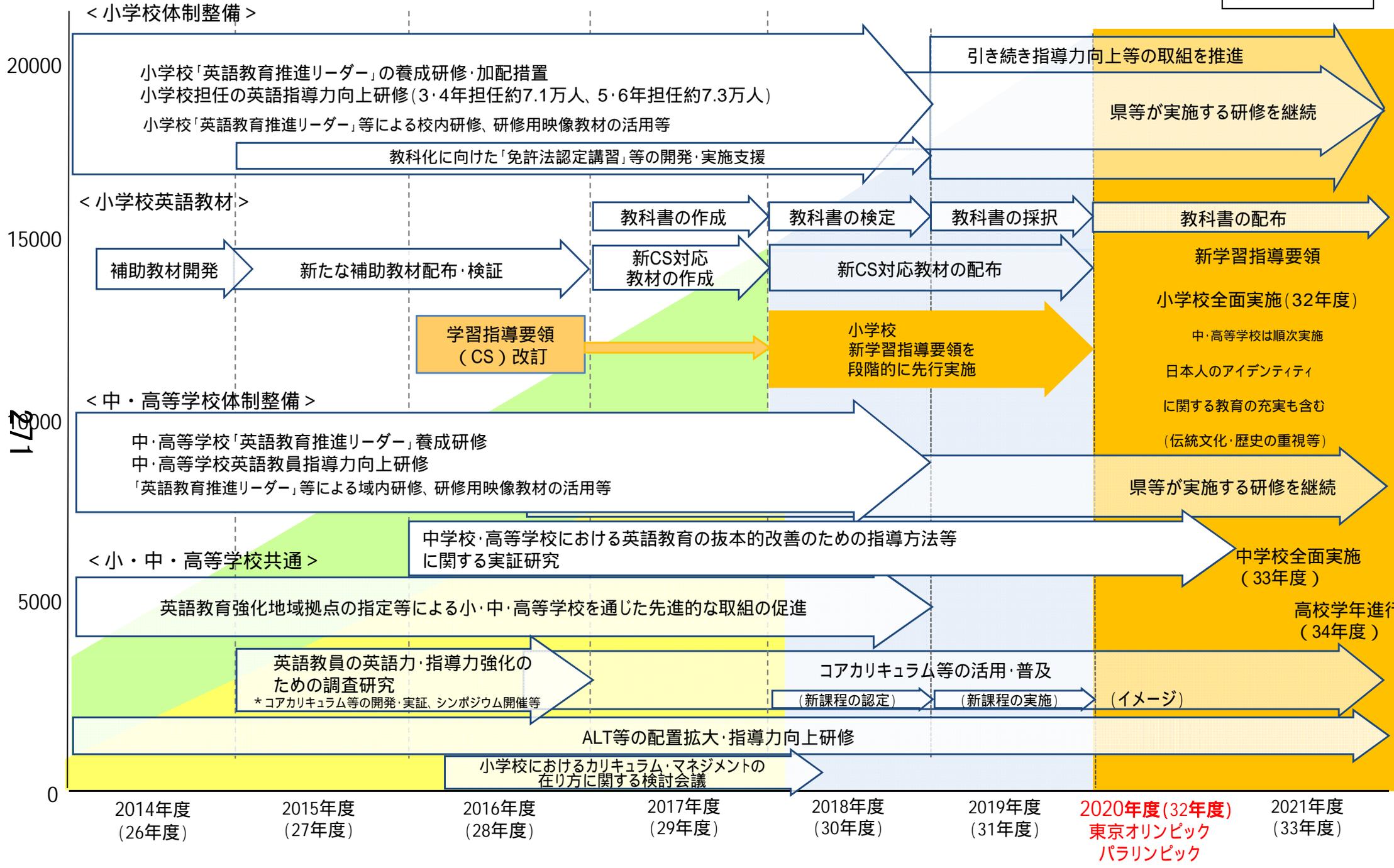
(図2)

| | | | | | | |
|----|---------|---------|-------|-------|-------|-------------------|
| 3年 | 受検者数 | 5級受検レベル | 5級レベル | 4級レベル | 3級レベル | 準2級レベル またはそれ以上 |
| 市 | 3,166人 | 12% | | 25% | 39% | 24% |
| 県 | 40,911人 | 16% | | 26% | 36% | 22% |

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画スケジュール(イメージ)

参考資料

(小学校数)



国が定める標準授業時数に上乗せして実施する小学校
研究開発学校・教育課程特例校(現行の教育課程の基準によらない)
新学習指導要領(小学校英語)の先行実施

CEFRとは、シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集のために、透明性が高く分かりやすく参照できるものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会（Council of Europe.）が発表。

外国語教育の抜本的強化のイメージ

新たな外国語教育

成熟社会にふさわしい我が国の価値を海外展開したり、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成

大学や海外、社会で英語力などを伸ばす基盤を確実に育成

高校卒業レベルで
4000語～5000語程度

高校で
1800～
2500語
程度

中学校
で1600
～1800
語程度

小学校
で600～
700語
程度

高校卒業レベル
で3000語

高く
1800語

中で
1200語

現状

【高等学校】
目標：コミュニケーション能力を養う
授業は外国語で行うことが基本

国の目標（英検準2～2級程度等50%）
現状32%
・生徒の学習意欲、「書く」「話す」に課題
・言語活動が十分でない

【中学校】
教科型を通じた「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的育成
目標：コミュニケーション能力の基礎を養う
前回改訂で週3週4に増

・国の目標（英検3級程度等50%）
現状35%
・言語活動が十分でない

年間140単位時間（週4コマ程度）

【小学校高学年】
活動型
目標：「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の素地を養う
学級担任を中心に指導

外国語活動が成果を上げ、児童の「読む」「書く」も含めた系統的な学習への知的欲求が高まっている状況

年間35単位時間（週1コマ程度）

【高等学校】

目標例：例えば、ある程度の長さの新聞記事を速読して必要な情報を取り出したり、社会的な問題や時事問題など幅広い話題について課題研究したことを発表・議論したりすることができるようにする。
外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、他者に配慮しながら、幅広い話題について情報や考えなどを外国語で的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力を養う。
授業を外国語で行うことを基本とするとともに、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を総合的に扱う言語活動特に、課題がある「話すこと」「書くこと」において発信力を強化する言語活動を充実（発表、討論・議論、交渉等）。

【中学校】

目標例：例えば、短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができるようにする。
互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視した授業を外国語で行うことを基本とする。
外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、他者に配慮しながら、具体的に身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。

教科型 【小学校高学年】 【小学校】

年間70単位時間

目標例：例えば、馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、家族、一日の生活などについて、友達に質問したり質問に答えたりできるようにする。
外国語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら聞いたり話したりすることに加えて、読んだり書いたりすることについての態度の育成も含めた、コミュニケーション能力の基礎を養う。
学級担任が専門性を高め指導、併せて専科指導を行う教員を活用、ALT等を一層積極的に活用。

活動型 【小学校中学年】

年間35単位時間

外国語を通じて、言語やその背景にある文化の多様性を尊重し、相手に配慮しながら聞いたり話したりすることを中心としたコミュニケーション能力の素地を養う。
主に学級担任がALT等を一層積極的に活用したT・Tを中心とした指導。

高等学校基礎学力
テスト（仮称）

改善のためのPDCAサイクル

全国学力・学習状況調査

改善のためのPDCAサイクル